

白熊が見た淫夢 2

# 地下牢で 処刑を待つ日々

山牧田 湧進



【まえがき】

※【ご注意下さい】

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

※ストーリーそのものは完全に単独のものとなっておりますので、他の作品を知らなくてもお楽しみいただけます。

※残虐要素はありません。

軍隊壊滅の危機を救おうと一人生命を擲<sup>なげう</sup>って投降した聖騎士イヌカイは身包みを全て剥がされ全裸で地下牢に閉じ込められた。

処分の決定を待つ間、交代する看守の中に、イヌカイにちょっとした意を出す元黒騎士の男がいた。

男はイヌカイが性的にも不自由を強いられる国の民であることを知りながら、いやらしい笑みでイヌカイに意地悪な性的尋問を繰り返した。

容赦なく性的快感の素晴らしさをガンガン叩き込んでくる男に屈して登り詰め

てしまうイヌカイは、そこで初めて性の悦びを知り、生への未練を覚えた。

皮肉なことに、雁字搦<sup>がら</sup>めの息苦しい国で自分の人生を歩むことができなかったイヌカイは、他国に捕らわれて母国から隔離されることで逆に解放されて、初めて、自分の人生を自分のものとすることができたのだ。

しかし、それもこれも、処刑されるまでの生命。

イヌカイは人生の最後の最後にして偶然掴むことのできた自由に、何も知らずに諦めて死ぬよりも、素晴らしいことをもっと知ってより大きな未練を残して死ぬ方が幸せなんだ、と考え、男との濃厚な性のまぐわいを真剣に熟<sup>こな</sup>していくのだった。

【主な登場人物】

・イヌカイ

貧富の差と不寛容を極めた帝国トディダイに生まれ、騎士団の長であり聖騎士であるが、自由主義国家エルジビティ侵攻の失敗により投降し捕虜となる。剛健な筋肉に脂肪ですら逞しく太く纏わり付き、体毛少ないながら白い肌の美しくも優しい風貌はさながら『伝説の白熊』のよう。輪郭を縁取る短い髭が凛々しくも可愛く、格好良さと可愛さを両立している。これほどの男でも環境のせいで年齢30にして童貞。オナニーなどの性体験もほとんど無かった。

(犬養 いぬかい おさむ 耕の夢世界のアバター。犬養 耕は『Starring 犬養 耕』『黒熊 meets 伝説の白熊』『白熊山荘』の主人公です。『白熊が見た淫夢』の1は『黒熊 meets 伝説の白熊』に付録しています。)

・バンドウ

流れ人から自由主義国家エルジビティに定住するようになった元黒騎士。イヌカイに負けぬほど豪勢な肉体を持っているが、外見は僅かに丸みが強く、背中にもびっちり生えている体毛と浅黒い肌が対照的である。イヌカイが白熊ならバンドウは黒熊。肉が盛り上がる広い頬つぺたの全域に髭が生える、意地悪くニヤつくいやらしエロい微笑みがチャームポイント。イヌカイの看守に当たり、イヌカイにちよっかいを出すエロ救世主。

(利根<sup>とね</sup> 万道<sup>ばんどう</sup>の夢世界のアバター。利根 万道は『黒熊 meets 伝説の白熊』5, と過<sup>い</sup>す犯られ三昧ツアー』『山奥の更生施設にて』の主人公です。『Starring 犬養耕』にも少しだけ登場し、『白熊が見た淫夢』の1でも犬養の相手役を務めています。)

【目次】

表紙	1
まえがき	2
あらすじ	3
主な登場人物	5
第1章 地下牢に閉じ込められるとき	8
第2章 男に男根を弄られるとき	17
第3章 男の口に責められるとき	19
第4章 男の尻を攻めるとき	21
第5章 男を待ちわびるとき	23
第6章 男に抱かれるとき	25

第7章	抱き合う最後のとき	27
第8章	地下牢を後にするとき	29
奥付		31



## 第1章

# 地下牢に閉じ込められるとき

城の地下へ、百段はゆうに超えるであろう真っ直ぐな階段が続いている。

普通の大人ならすれ違いも出来ようが、聖騎士イヌカイの巨体では少なくともかなりの摩擦を起こさぬことにはすれ違うこともできない。

そんな狭い石段が、吸い込まれそうな闇に向かって一直線に延びている。

帝国トディダイから派遣された兵士の一団は、ここ、自由主義国家エルジビティの意外な強さに壊滅の危機に瀕した。

騎士団の長、聖騎士イヌカイは団を退却、散開させつつ、せめて他の団員達を守ろうと一人投降し、自らの身と命を差し出したのだった。

圧倒させられるような大きさの甲冑を全て剥ぎ取られ、隠し布一つすら残されなかったイヌカイの裸体はしかし、それでもまだ豪奢だった。

分厚い筋肉の上を、実力を隠すかのように覆い尽くす白い贅肉のオーラは、いまだに甲冑を身に纏った聖騎士、ホワイトナイトのそれだった。

それそのものがただの枷<sup>かせ</sup>ではなく、錘<sup>おもり</sup>にもなっている首輪。

それと鎖で繋がれている、これまた錘を兼ねている手錠。

ひたすらに自由を奪われたイヌカイは、それでも堂々と姿勢を正したまま、前後を固める城の兵士2人に連れられて階段を下りて行った。

ただただ、地獄へと歩みを進めて行くだけかのように思えた先の暗闇だったが、先頭の兵士は随所に明かりを灯しながら進んで行く。

どうやら、この地下が使われること自体が久し振りのことのようなのだ。

階段を下りきったところに、見張り兵の仕事場所であろう少々の広間と左一面にのみ広がる檻<sup>おり</sup>があった。

この地下には牢が一つだけしかないらしい。

つまりは、それだけ重要な人物の幽閉にのみ使用されるもの、だということな

のだろうか。

一つだけの牢に一人の監視が付けばそれだけでマンツーマン。それ以外の人物も絡むならば、この牢を使用するのに費やされる労力はかなり割に合わないものとなる。

兵士は牢の扉を開けて、イヌカイに入るように促した。

牢の扉も、鉄格子も、コストを度外視したような重厚さで、例え剛力のイヌカイをもってしても、曲げられることすらできそうにない。

頑丈な鍵を掛けられると、兵士はその扉の鍵とは異なる鍵を牢の中へと投げ込んできた。

「それで首輪と手錠を外すと良い」

なるほど、この地下牢に対する自信が伺えた。

しかしここから、イヌカイが驚くようなことが連続して起こる。

そう、どうもこの自由主義国家エルジビティはトディダイの民には理解のできない先進的な技術を多数持ち得ているようなのだ。

豊かそうなのに、一見、無防備にも見える緩さを感じる国エルジビティ。

そんな国の豊かさを略奪しようと企む他国は数知れず、ガチガチの戒律で窮屈な人生を強いられるトディダイもそんな隣国の一つだった。

それでも、エルジビティは一向に陥落しない。その強さを誇示することもなく、常に粛々と佇んでいる。

その秘密の一端が垣間見えたような気がしたのだ。

イヌカイは当初、牢内の様子を気に掛けることもなく、ただ、すぐその場の地

面に座り込んで壁に背中を凭<sup>もた</sup>れていた。

せつかく投げ入れてくれた鍵にも目もくれず、重い首輪と手錠はイヌカイを拘束したままだ。

しかし、ことイヌカイにとってはこの重い枷の重さ自体はそれほど苦になるものではなかった。

常人には非常に辛いであろうこの重量も、それを超えるかもしれない甲冑を身に着けていたイヌカイには造作もないこと。

その負荷が例え首に集中していようと、強固な筋力と分厚い肉甲冑の双方を自らの身に纏っているイヌカイには大した負担ではなかったのだ。

一方で兵士も不可解な行動に出る。

なんと、その場に留まり監視を続けるであろうと思われた兵士2人は揃って階段を上がって行ってしまふ。

いくらこの地下牢に自信があると言っても、それは少々自信過剰に過ぎるので

はないか？

トディダイという自分の生まれた国しか知らなかったイヌカイにはそうも思えたものだった。

それは何も反逆することばかりではない。

ここまで監視の目が薄いのであれば、自決することも自由なのだ。

イヌカイは国のため、部下のために、その命を投げ捨てた。

もう、イヌカイ本人の心の中ではこの人生は終わっている、既に過去形のものなのだ。

しかし、イヌカイ以外にだれも居なくなっただけなの、この地中深くの独房に突如、他者の声が響いた。

「鍵を使わないのか？」

イヌカイは驚いて首を持ち上げ、辺りを見回してみる。

兵士がある程度明かりを点けたとはいえまだ暗がりの方方に残っていて、あまりハッキリと見えるわけではなかったのだが、それでも人影があるようには思えない、気配すらしない。

ただ、声だけはするのだ。

「どのみち、いずれ処刑の日はやってくる。それまで、せいぜい楽にしておくが  
良い」

イヌカイは改めて声のする方向を見定める。

だが、その先にはどう見ても人の姿は見当たらないのだ。

「ただし、おかしいな真似はしないことだ。反逆や脱獄、あるいは自決であったとしても、勝手なことをすれば、せっかく貴殿が庇<sup>かば</sup>ったつもりであろう貴殿の部下達がどうなることか。それをよく肝に銘じておくように」

イヌカイは姿の见えない声に驚きながらも、自ら命を擲<sup>なげう</sup>って講じた最終手段も



結局は無駄骨に終わってしまったことを知って愕然とした。

既に自分が終わっていることは覚悟済みであったイヌカイだったが、全てが終わったことに改めて落胆したのだった。

しかし、そのタイミングで、ふっと、声のしていた方向に近いところに弱い明かりが灯った。

イヌカイは落胆を一瞬忘れてしまうほど驚いた。

重い首枷をもつともせず、明かりを見上げると、どうもこの地下牢が、ただの殺風景な伽藍堂がらんどうではないらしいことによく気づく。

そして、明かりの周囲を少し観察した後、改めてこの地下牢に興味を持ったイヌカイはその様子を詳細に知ろうと、ようやく鍵に手を伸ばしたのだった。

（こちらは体験版です）

## 第2章

### 男に男根を弄られるとき

(こちらは体験版です)

## 第3章

# 男の口に責められるとき

(こちらは体験版です)

## 第4章

### 男の尻を攻めるとき

（こちらは体験版です）

## 第5章

### 男を待ちわびるとき



(こちらは体験版です)

## 第6章

### 男に抱かれるとき

(こちらは体験版です)

## 第7章

### 抱き合う最後のとき



（こちらは体験版です）



## 第8章

### 地下牢を後にするとき



(こちらは体験版です)





# 地下牢で処刑を待つ日々

## 白熊が見た淫夢 2

OpusNo.            Novel-058  
ReleaseDate      2019-05-14  
CopyRight ©      山牧田 湧進  
& Author          (Yamakida Yuushin)  
Circle              Gradual Improvement  
URL                [gi.dodoit.info](http://gi.dodoit.info)

個人で楽しんでいただく作品です。  
個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、  
共有、アップロード等はしないでください。  
(こちらは体験版です)